

これについては上人の性行の條で詳しく述べるつもりである。

かくて天保三年六月十五日。上人流謫の旅はまづ伏見へ、それから淀川を舟で浪華へ向はれた。折柄、雨もよひだつた空からは大粒な雨が落ちて来た。

立出づる都の空は かき曇り

なみだや雨とふりにけるかも。

上人の吟詠である。浪華で船を乗り換へられ、その名も故郷に近き伊勢丸は、瀬戸内海を一路西へ西へと進んで七月十六日には赤間関の灘にかゝられた。

八月十五日の月は肥前松島で観賞せられ、同行の旅客と詩歌の應酬などによつて長い船路の無聊を慰められ、八月廿三日には天草島富岡港へ着船、思ひ出の船に名残を惜んで、それから陸路をとつて、九月朔日を町田郷のいぶせき草庵に入られたのである。

今まで繁華な京洛の地で、然も榮譽ある職について、權勢をふるつて生活して居られた上人が、今かうした山庵の前に立たれた時の隔世の感、あまりの轉愛のさまに思はず、

思ひまや夢にも知らぬ此里を

この身のすへのすみかなりととは。

と口ずさまれたのであつた。

(四) 天草島の上人

其後——暫くの間は、自然の美しさを味ひ、附近の寺や、僧侶などを尋ねて詩歌にふけて静かな生活をせられる事となつた。そして自ら殘夢道人と号された。

めで、來し 花も紅葉もちり果て、
我身に残る 夢の世の中

然しその生活の激変によるあまりの淋しさに、故郷を思ひ、父母をなつかしみ知人の音信をしたはれた上人当時の心持も、かなり悩み深い詩となり、歌となつて残されてゐる。

由來上人は詩歌の名人ではない。たゞ時折にその生活を率直に表現されるだけである。言はゞ上人の体験の記録である。だから上人の作は魂の奥底にひびく強い力を持つてゐるものであると思ふ。

山家年暮

年のくれ いかに心の動くらむ

山はうき世の外ときゝしも

卯月謫屋のほとりに時鳥の鳴くをきゝて(天保四年)

物思ふ人の家居ぞ ほとゝぎす

もらす初音も こゝろして鳴け

聞くまゝにいとゞあはれのまさりける

旅寝の夜半の初ほとゝぎす

然し詩に歌に、そして法の道に精進の上人は、又心の餘裕があつた。

遠思故人思有餘

好移竹杖向幽居

新詩日落工愈就

清話夜闌心自舒

そして天保五年二月には清流に沿つて草庵を結ばれて、臨川庵と名づけられた。臨川庵の所在は、天草郡竜町田村大字河浦の志戸の辺田にあつて、前は竜町田川にのぞみ、後は清龍山を負ひ閑静絶塵の地である。草庵のおつた所は、今は竹林になつて、御崎信彦氏の所有地で、庭園であつた所は、同じく彼地の池崎友義氏の所有地となつており、中に谷川を挟んで大きな石橋が架せられてある。これも竹林になつてゐる。

いさぎよき川のほとりに庵をしめて

心をすます水の音かな

たえずしも川の流をながめつゝ

深くも思ふ身のゆくへかな

臨川庵

(古体)

屋後山高巔到岑

亭前地迫澗溪深

櫨樟好爲影

清川在樹陰

捲簾斜日未書案

開戶南風吹臥衾

誰知此裡閑居樂

有酒酌酒詩就吟

人事生涯無所預

日臨流水濯禪心

石の詩歌によつて、庵の狀況はおよそ想像し得られるものであらう。

其後同年三月には長崎へ渡つてから、筑前太宰府参詣の旅に出られた。委しい其道中記も書かれてあつたやうであるが、今傳つてゐないのは残念である。大畧を記してみると、

三月十七日に長崎へ渡つて、萬年山三寶寺に滞在、同月廿二日長崎を出発して伊木力といふ渡場をこえ、太村城下、それから松原から彼杵の駅、二の瀬、ついで佐賀領へ入つて、嬉野温泉に浸つて、北方といふ駅に出、あせ村に俊寛僧都の古跡法性寺に詣で、佐賀城を過ぎ、神崎の駅、三月廿五日、目的の太宰府天満宮に詣して、

千早振神の御前にぬかづきて、よろづ守れといひのるなりけり

次いで箱崎八幡宮へ参詣して

ふしておかみ、あふぎていのる箱崎の八幡の神の玉垣の前

其後豊前彦山へ登り、彦山から羅漢寺に参り、山路を毛屋邑にとり、宇佐八幡宮、筑後國善導寺、高良山玉垂宮、筑後瀬之下水天宮、柳川領本吉山清水寺に参拜、ついで肥後國阿蘇山の絶景を賞し、小川駅を過ぎ、鎮西八郎爲朝の古跡鷹回山を見て、嶋原に出で、雲仙嶽、一乗院を拜参し、嶋原小瀬の湯に浴し、肥前康島領陀庵院の明神に参り、初夏の螢火の景観をめで、大村城下に入り、四十三日の九州めぐりを終つて、長崎萬年山へ歸着された。

上人が臨川庵に居をうつされた頃から附近の詩人、歌人、僧俗のわかちなく、この清洒な庵室を訪れる客が踵えて来た。

然し何と言つても淋しい生活であつた。それは流人となつてから、非僧、非俗の上人の心中にも、この淋しさは耐え得られないものであつたであらう。又健康もどの頃はあまりすぐれてゐなかつたらしい。

題 謫屋壁

離群萬里漂流身 非俗非僧懶索隣
意外幽栖憂病體 囊中無物樂清貧

開懷舊事淚千滴 遠望鄉山月一輪
不識殘年猶幾箇 耐磋終世旅家人

次いで天保六年、故郷の慈兄伊右衛門と友藏といふ者が、はるぐ上人をたづねて来た。上人の喜びはさこそと思ひやられる。

わすれじな波路はるかに尋ね來ぬ

と、ろつくしの君が情を

更にも一人の珍客、上人が在京中に召使はれてゐた有藏といふものが来て、久かたぶりに京洛の動靜を傳へたものであつた。

むすびおくえにしのさらにくちせずば

またも來よかしと、ろつくしに

かうした故郷及京洛の動靜をうか、びなからの侘しい草庵の住居での、上人の苦惱、憂鬱もさこそ思はれるもので、かゝる魂の争闘に對して常になやみつゞけ然も経済的不如意のための苦痛の深刻なものであつたのは、上人の當時の詩歌に充分窺はれるものである。

人間としての上人の悩み——雨風の人生に處せられた奮闘、これこそは実に尊いもので、上人が魂の英雄であつた事を私が特に高唱する所以である。私達はこの悩み生きられた上人に對しては、人生と肩をならべた偉大な友達としての上人

の姿をはつきりと認め得るものである。

水近山深家自靜 無錢無米慰清貧
煎茶一碗養心處 還嘆萍流是似身

これ等は実に血のにぐんでゐるやうな生活記録なのである。然もその苦しい生活の中からも上人は、宮地岳麓の名勝を探ったり、長崎正覺山大音寺を訪ねたりなどして、吟弄心を澄ませてゐられた。

天保元年、叔父の月亭和尚は其頃太泉寺を退いて、近江三井寺門前邊にゐられたが、五月十二日勿然として逝かれ、この訃報が此の島へとゞいたのは同年八月十二日であつた。上人のためには、在京時代親代りとして盡された和尚の死は、実に慰はぬ驚きであつたであらう。

過しころ聞きつる夜半の時鳥

われにも鳴けと月やしのびし

とある。

17
天保十一庚子の四月二日に再び九州巡歴の爲めに草庵を出でられた。旅程は大宮地村に暫く滞在し、二十五日同所を出立、本戸村赤嶽を眺めて、志柿海邊を通つて、嶋子より赤崎に至り、合津から阿村と天草上島の北海辺を通つて、川尻か

ら熊本、それから肥後阿蘇山の麓から高森の駅へ出られた。寂寥たる山間の味ひ、時鳥の鳴く音に心を傷ませ、やがて日向高千穂へ出られ、山道をすぎ、五ヶ瀬川の急流に舟を之べて延岡へ達せられた。

日向國景清の墓、生目八幡宮などの遺跡をたづね、それからずつと南下して、鶴戸山へ参詣、次いで榎原山へ詣で、飢肥から山を越えて、再び延岡へ歸られた。

山路遇雨

寂然新樹裡

雨夕路愈深

雲擁前山暗

旅人堪慙心

雨中山行

溪水聲高路兩間

痴雲吞吐未看山

誰知獨步寥々裡

雨露傷神更不開

其後以前の高千穂の山へ登つて、神代の旧跡をかれこれと探られ、六月朔日に旅行三十八日目に臨川庵へ戻つて來られたのであつた。

前後二回、上人は美しき九州の山野に接せられ心を清め氣を養はれたのであつたが旅人の如きその生涯の中の旅、上人自ら――

歸り未ぬ いほりも旅の宿ながら わか住む里と思ふおかし
と、微苦笑を禁じ得られなかつたであらう。

其後も相変らず花鳥風月を吟詠して過されたが、当時上人の筆になつてゐる、
天草郡の略誌は、簡潔ではあるが当時の状態が描かれてゐて、寧ろ又歌であると
思ふので左に掲げる事にした。

天草郡のことを中華の人のためにあらましをこゝにしるす。

抑、天草といふは肥後國十四郡の一にして離島なり。廣さ凡そ東西二十里
南北十三里三つに切れてある故に一名三島と字し、又嶋の形環貝に似たる
とて洞螺洲等異名せり。

其土地東は肥後國宇北郡に纔に海上一里餘、南は薩州長島の地へ九海上
三里、北は肥前高來郡へ暖湯原三里餘にして、雲仙嶽などへ地続きの如く
見ゆ。同國彼杵郡へ海上七里にして長崎の地へ海陸八里餘、西は大灘にし
て異國の積水なり。相傳ふ当島より大阪迄海上凡計百五十里の内也と。唐土は大坂里數よ
り余程近しと云ふ。

この西の方浦に別而 異國船漂着の場所にて山々に遠見番所立られ、日
日遠目鏡番人相詰居、並ニ非常用薙として、放火臺の場所も定めあり。其

内牛深浦、崎津浦兩所は大湊にして、常日數百艘の舟入津あるゆへ見張番所もありて、威儀嚴重のことなりき。また此兩所數千軒の湊ゆへ常日遊女等も數多居りて、嶋中第一の繁華也。初嶋中の村數八十八ヶ村但し寺領村にあり。あるを十組に領ちありて、組本十個所也予が配所幸田も其組一なり

いづれも山野の草木、菜類はいふに及はず苓といふ草もあり。其外菜種の類もありて不足なき所なり。其上諸國へ至而便利の地にて、何によらず不足もなく、殊に米の味好き事、大凡日本一ともいふべし。惣じて食物に豊饒なる所ゆへ、饑饉にて餓死するといふやうのことわかしよりなしと云。將又薪類沢山にあり。材本就中樫、杉、楠、よし、砥石、焼物の土等、名物多し。魚類、海藻之類珍品、産物いろくあり。実に万事に自在にいたりたる所なり。故に有賤の者も數多これあり。

三都はじめ諸國の遊客、風流多才のもの或は細工人、醫師、儒者、諸藝者の類等来りて、種々の道を教示するゆへに、上下ともに次第に諸道に達し、學者才人多し。別而毎年秋八月頃より京大阪并に豊後、肥後八代邊より歌舞妓役者共多く来りて狂言興行、何れの村にても四五日より十日、十四五日宛、村の大小によりて、百姓方作毛の願成就と称して、せぬ村はなし。實に邊鄙の一都會といふべし。唯都へ遠く邊土といふまでのことにてか程の繁昌せる土地は諸國の中にもすくなかるべし。